

翻訳という世界



船越 隆子
翻訳家

英語版をそのまま和訳して出すわけではなかった。日本ではどんな分野の記録に興味が集まるか、今年はそのテーマを重点的に取り上げるかなどを考えて、掲載する記録を選んでいく。

8月になると、思い出すことがある。何年も過ぎてしまえば、それもまた懐かしかったりするのだけれど、当時は暑い中、けこつたいへんな思いをした。もちろん翻訳の仕事の話。

「ギネス世界記録」という本を、2004年版から2008年版まで訳させてもらったことがある。テレビなどでもよく耳にするあのギネス、ありとあらゆる分野の世界一を認定し、一冊にまとめた年刊誌だ。英語のオリジナル版は毎年9月に発行され、日本語版はそれを追いかけて11月ごろに出る。そのためにはちようど1年、つまり真夏に翻訳作業をすることになる。

日本語版の出版社が数年前に変わってしまったので、今の事情は分からないが、私が携わっていた時には、

ギネス世界記録 作業は真夏に集中

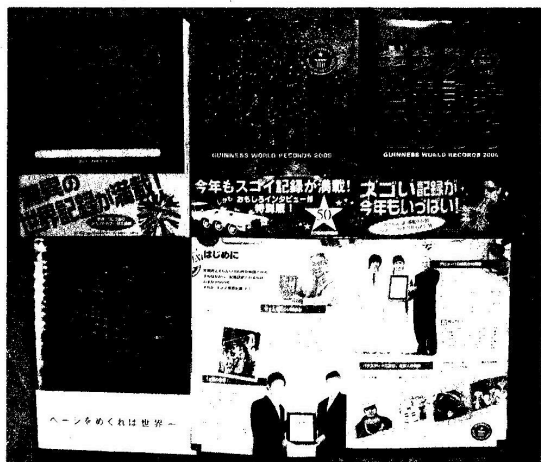
〈5〉

ギネス世界記録

りにはユーモアたっぷりに見える記録(顔に最も多くの洗濯ばさみをとめた)などだ。

科学技術に関するページでは、最新の科学を調べて確認しながらの作業になる。文系人間の私では一般的な科学の知識を怪しくらいだから、ギネスの記録になるような最新の科学となればほとんど未知の世界。まずはその専門の基礎知識をある程度理解してからでなければ日本語にできない。それも、ナノテクノロジーから宇宙技術まで、それこそ多種多様な記録が「録」は、写真や装飾が多い間にかかなりの分量を翻訳しなければならぬ。

それでも、ナノテクノロジーから宇宙技術まで、それこそ多種多様な記録が「録」は、写真や装飾が多い間にかかなりの分量を翻訳しなければならぬ。



「小惑星から物質を持ち帰った世界初の探査機」として認められたはやぶさや、「世界一高い自立型の電波塔」になった建設中の東京スカイツリーも、いずれ掲載されることだろう。「ギネス」に限らず、こんなふうに思いがけない世界や事実を垣間見ることができるのも、翻訳という仕事の醍醐味かもしれない。

(徳島市在住)

新しい発見あり楽しみも